

白虎加人參湯と黄連解毒湯で 加療した顔の赤みの3症例

ラサ内科皮膚科クリニック(新潟県) 諸橋 弘子

漢方医学では、皮膚の症状は全身状態の表れといわれ、顔の赤みやほてりを上焦の熱と捉えている。今回、女性の顔の赤みやほてりに対し、白虎加人參湯と黄連解毒湯の併用加療を試みたところ、標治にて比較的短期間での改善を認めた。短期間での治療効果を求めるために、単剤での治療よりも速やかな効果発現が期待できる白虎加人參湯と黄連解毒湯の併用が有用であると考ええる。

Keywords 顔の赤み・ほてり、白虎加人參湯、黄連解毒湯、錠剤

はじめに

美容に対する女性の関心は今昔変わらずに高く、しみやくすみに対する美白スキンケア市場はかなり拡大している。痤瘡などの皮疹も女性の悩みの一つではあるが、特に皮疹がない場合であっても、顔の赤みやほてりを訴えて来院する女性は少なくない。しかしながら、赤みやほてりに対して確立された治療法はなく、西洋医学的な対症療法では十分な効果が得られない症例も存在する。一方、漢方医学では顔の赤みやほてりを上焦の熱と捉えて、清熱作用のある漢方薬を使用することで改善する場合がある。

今回、顔の赤み・ほてりに対し、白虎加人參湯と黄連解毒湯を併用したところ、標治にて軽快した症例を経験したので報告する。

症例1 43歳 女性

【主 訴】 頬の赤みとほてり

【現病歴】 3年前より顔の発疹の治療でステロイド外用剤を半年間塗布していたが、その副作用により頬の赤みとほてりが治らない。

【診 断】 酒皰様皮膚炎

【経 過】 前医の処方(ミノサイクリン塩酸塩、ベポタスチンベシル酸塩、白虎加人參湯エキス顆粒、メトロニダゾール軟膏)は中止し、外用薬は処方せず、白虎加人參湯エキス錠12錠/日および黄連解毒湯エキス錠18錠/日のみを処方したところ、2ヵ月で改善が認められた(図1)。

症例2 34歳 女性

【主 訴】 顔の赤みとほてり

【現病歴】 2年前より顔の赤みと痤瘡で市販の外用薬を使用していた。痤瘡は改善してきたが、顔の赤みとほてりが困る。

【診 断】 尋常性痤瘡

【経 過】 市販の外用薬は中止し、白虎加人參湯エキス錠12錠/日、黄連解毒湯エキス錠18錠/日を処方し、3ヵ月で症状は消失した。

症例3 20歳 女性

【主 訴】 頬の赤みと痒みのある発疹

【現病歴】 10年前より、頬の赤みと痒みのある発疹が続く。

【診 断】 顔面湿疹

【経 過】 白虎加人參湯エキス錠12錠/日、黄連解毒湯エキス錠18錠/日、エピナスチン塩酸塩20mg 1錠/日、外用薬(ヘパリン類似物質)にて1ヵ月で完治した(図2)。

考 察

漢方医学では、「皮膚は内臓の鏡」といわれるように、皮膚の症状は全身の状態の表われと考え、顔の赤みやほてりについては上焦の熱と捉えることができる。急性症状を呈している場合は、標治として皮表の症状を目標に清熱などの対症療法が中心となるが、慢性症状の場合は標治のみで治癒に至らせることは困難で、五臓六腑・気血水のバランスを捉えて治療する本治が必要となる¹⁾。しかしながら、標治に比べ、本治の場合は効果が発現するまでに時間がかかってしまうことがある。皮膚科の場合、症状の程度が患者からもわかりやすいため、短期間で効果が認められないと他院へ行ってしまふ患者も少なくない。皮膚科診療においては脱落例を減らすためにも、速やかな効果発現が期待できる治療法が必要となる。そこで、今回、女性の顔の赤みやほてりに対し、清熱作用を持った白虎加人參湯と黄連解毒湯の併用で加療を行なったところ、標治ではあるが

図1 症例1



図2 症例3



図3 白虎加人参湯の構成生薬⁸⁾

白虎加人参湯			
人 参 (1.5)	生津・補気		
白虎湯			
石 膏 (15)	清熱瀉火	解毒	
知 母 (5)			
粳 米 (8)	生津	健脾	
甘 草 (2)			

図4 黄連解毒湯の構成生薬⁹⁾

黄連解毒湯			
黄 連 (1.5)	清熱瀉火・解毒・涼血・化湿	利胆	
黄 芩 (3)			
黄 柏 (1.5)			
山梔子 (2)			

1～3ヵ月と比較的短期間で改善を認めた。

白虎加人参湯には石膏・知母、黄連解毒湯には黄連・黄芩・黄柏・山梔子といった清熱作用のある生薬が配合されており(図3、4)、それぞれ赤みやほてりが現れるアトピー性皮膚炎^{2, 3)}や酒皰様皮膚炎^{4, 5)}などに使用される。

今回のような難治の症例に対しては、単剤での治療よりも、清熱作用を増強し、速やかな効果発現が期待できる白虎加人参湯と黄連解毒湯の併用は有用であった。なお、清熱作用を強力にしたことで懸念される冷えの悪化や下痢などの胃腸障害、さらには肝臓や腎臓における大きな副作用は今のところ経験していない。

顔の赤みやほてりに対しては、三物黄芩湯や升麻葛根湯、治頭瘡一方なども使われることがあるが、今回のような症例にはファーストチョイスとなりにくい上に、こ

れらには錠剤がない。漢方薬には独特の味や匂いがあるため、顆粒剤などでは服用の拒否や継続服用が困難な場合がある。実際、漢方薬を服用している患者のうち約3割は「味がまずい」や「粉っぽくてむせてしまう」などを理由として顆粒剤が飲みにくいと回答し⁶⁾、また味や匂いなどを理由として漢方薬が飲みにくいと訴える患者では錠剤を希望しているとの報告もある⁷⁾。一方、白虎加人参湯と黄連解毒湯には錠剤が存在する。特に黄連解毒湯は苦味が強く、飲みにくさを訴えるケースが多い。そこで、今回、味や匂い、粉っぽさを感じにくい錠剤を使用したところ、1～3ヵ月間の継続服用が可能であった。また、2剤を併用することで1回の服用数が多くなることから、服薬コンプライアンスの低下が心配されるが、治したいと強く願う患者にとっては服薬困難な量ではなかった。

以上のことから、白虎加人参湯と黄連解毒湯の錠剤の併用は顔の赤みやほてりに対して有用であることが示唆された。

【参考文献】

- 1) 二宮文乃: 図解・症例 皮膚疾患の漢方治療, 源草社: 11-83, 2008
- 2) 夏秋 優: 白虎加人参湯のアトピー性皮膚炎患者に対する臨床効果の検討, 日東医誌, 59 (3): 483-489, 2008
- 3) 豊田雅彦 ほか: 2.アトピー性皮膚炎に対する黄連解毒湯の臨床効果: 随証投与の有用性を含めて, 漢方と免疫・アレルギー, 18: 77-86, 2005
- 4) 橋本喜夫: 酒皰及び酒皰様皮膚炎に対する漢方薬の有用性ー特に白虎加人参湯の有用性ー, 漢方医学, 34 (4): 45-50, 2010
- 5) 手塚匡哉: 酒皰様皮膚炎に対するクラリスロマイシンと黄連解毒湯の併用療法の検討, 新薬と臨床, 56 (7): 164-171, 2007
- 6) 五十嵐信智 ほか: 漢方専門外来受診患者における漢方薬服用に関する実態調査ー漢方薬に対する患者の認識とコンプライアンスー, 日東医誌, 60 (4): 435-442, 2009
- 7) 吉岡史郎 ほか: 漢方薬の服薬に関する薬剤師の関与, 臨床と研究, 81 (6): 111-112, 2004
- 8) 安井廣迪: 臨床応用漢方処方ガイド, コーリン: 38-39, 2015
- 9) 安井廣迪: 臨床応用漢方処方ガイド, コーリン: 42-43, 2015